

美術の窓(62)

モネのジヴェルニーの庭を見物して

大和文華館館長 吉川 逸 治

今年(1980年)の晩夏、パリで活躍してゐる彫刻家の嘉野稔さん夫妻にお願いして、私共夫婦をパリから百キロメートルほど北にあるジヴェルニーの村のモネの庭の見物につれていてもらった。

有名なモネの睡蓮の池、日本式の太鼓橋のある庭を見にいったので、戦後長年ヴェルサイユ宮の美術館長を務めて、大変な業績をあげたヴァン・デル・ケンプ君が隠退して、ここを復旧に着手し、かつてのモネ晩年の住居となった田舎の大農家風の邸館、パリのオランジュリーのモネ美術館の大壁面を描くために建てた大きなアトリエとともに、数々の草花を植えた広い花壇、道路を距てて、先に述べた庭、これら一括して、ジヴェルニーのモネ美術館として新設しようと言ふので、すでに昨春から公開してゐるが、睡蓮の花ざかりの頃、訪れたパリの友人が、わざわざ、その素晴らしさを手紙に書いてよこし、パリの大学都市時代の旧友ヴァン・デル・ケンプの隠退後の新しい仕事を讃めてゐた。

八月半ばとて、訪ねた時は、新睡蓮園 モネ筆 国立西洋美術館



館長は渡米中で留守であり、庭の花も、盛りを過ぎて、木々の緑が濃くなりすぎてゐた。しかし、未完成だと言っても、このモネの邸宅と庭は誰にも感銘を与へるにちがひない。狭い入口から、すぐ広いアトリエに入るやうになってゐるが、そこにはまんなかに最初に描いた超大作「草上の食事」の残存した部分の実物大のカラー写真が壁一杯によせかけてあって、クールベを凌駕するやうな巨人として発足した青年モネの壮んな抱負が想像できてよい。この画で彼がすでに先輩のマネとちがって、外光といふものを中心にすべてをそれに従はせて作画する方針を打立ててゐる。製作中にクールベが来て見るが、気に入る筈はない。激しい議論が交はされたのであらうか、惜しいことに彼は「草上の食事」を出品することを断念して、大作はフォステンブローの傍の宿屋の納屋に巻かれたまま幾年も過し、一部は朽ちるといふ運命をたどつたと言ふ。

庭に出ると、まづ花壇を前に淡紅色の壁をした二階建の館が立ってゐて、大作「七面鳥」の背景になってゐる邸館がこれだと想ひ出される。睡蓮の池を巡って、晩年のモネは数々の精妙な画を描いてゐるが、殊にクレマンソーの提案する「モネ美術館」のための超大作を描くために毎日、孤独のうちに励んだところだと想ふと、身が縮る思ひがする。画壇からは時代遅れと見離され、友人たちは次々に死んだ。彼も価値を認め、十数余りも作品をもつてゐたセザンヌも、時折モネを訪ねて来たが、彼以上、孤独な晩年を送り死んだが、その翌年には回顧展が催され、却

って日ましに有名となる。彼がこれら超大作を描くころは、第一次大戦の最中であつたし、最後はこのあたりでも砲撃の轟きが遠雷の如く響いてゐたであらう。

ジヴェルニーの館と庭については、他の日本の先生方からすでに色々と聞いてゐた。ことに、矢代幸雄先生からは、松方幸次郎公卿のお伴をして、ジヴェルニーの邸宅に老モネに会ひ、邸内や庭を見物したことをその後も度々うかがつた。モネはどの部屋も浮世絵版画をいぢめんにはつて、沢山の浮世絵版画に取まかれて暮してゐたので、自然の光線で眼を養ふと同時に、西洋の伝統的な油絵の黒っぽい重苦しい調子に出会ふことを極力避け、あの明るい藍色が主調となつてゐる浮世絵版画の調和のうちに眼を休養させていたやうだと。直接には、ゴッホやゴッガンなどのやうに、浮世絵版画の影響を示すやうな言葉は残してゐないが、広重や北斎、歌麿などの版画は、モネの場合ももっとデリケートな接点を提供してゐたのに相違ない。そして、モネの創造の源で彼の視覚に親しく呼びかけていたのであらう。

私は大学を出て、早々にパリに留学して印象派の画を美術館や街の画商の展示で見て、感激したし、親し味を感じた。西洋の美術館へ行って、暗い名画の沢山たらんでゐるギャラリーを通過して、最後に印象派の部屋に着くと、急に壁面が画が明るくなって、部屋全体が晴々とし、まるでトンネルから脱け出てきたやうな感じを受けると矢代先生が言つてゐたことを思ひ出した。

なかでも驚いたのは、さきに言つたモネの美術館で、あの細かい多色の自由な筆触の印象派の技巧で、よくもこんなに大きな壁面に「睡蓮の池」の光線の輝く有様が描き写されたのだと驚嘆してしまつた。池の水面の睡蓮の色彩とそこに映ずる青空、彩どられた雲の様子など、自分の周囲を晴々とした

多色の光の交響曲で取囲んでゐる。この色彩の純然たる音楽が、天井から射し入る外光と協和する様子も素晴らしく、太陽が照り輝けばこの大きな部屋の色彩も明るく輝き、天上の歡喜を歌うがごとく、日が隠り、空が曇ると、周囲の色彩の交響曲も急に鎮まり、水面に降り、水底に沈んで、考へ込んでしまふ。一個の人間の眼が、これほど適確に大気の光線の様相、自然の色彩の調和を感じ捕へ、そのまま絵具の色彩に適確にその階調を写し、示すことが出来たといふ技術に驚嘆した。ここでは、池の水面を鏡として、天を満す光が上からも、下からも写し出され、多彩な天空の光線の絵画の展開に、岸辺の土手とそこに立つ柳の幹がところどころに区切をつけてゐる。これも桃山屏風の手法だと矢代先生は語つてゐた。

このモネ美術館は、小さい方の部屋から入るやうになってゐるが、小室の方は、樹々を間近に池の睡蓮が朝と夕に、半ば日に照され、半ば日陰になる姿で、暗い木陰とそこに反射し、また透過する光線の効果、逆光線の効果と、正面から新鮮な光線を浴びる半分の効果とを対照させて、陳び競ふのであるから、劇的な響で、堂内を満たしてゐる。印象派の表現でこんな劇的な激しきが出るとは想像もしなかつた。モネは後年、逆光線の効果を盛んに研究し、ものの陰に漂ふ赤、紫、茶、黄といった様々の光が暗きのなかに散り輝く空間を捉へようと苦心してゐる。それだけ、画面に厚味、深味が出てくるので、色彩の複雑な混り合ひと動き漂ひ、ひらめきの外に不思議な奥深さが加はつてゐる。モネは科学を信じ、工業の発達を謳歌してゐた合理的な人柄だつたから、宗教的な神秘とか象徴派の夢想などは縁遠かつたらうが、しかし、精神の活動の深さは、広さ大ききとともに表現することを知つてゐた。[『學鏡』第78巻第1号、1981年丸善より]